

陳独秀と中国トロツキストの関係について

王 易 琳

青谷政明訳

＊（……）は筆者注，〔……〕は訳者注である。

陳独秀は党籍を剥奪された後、墮落してトロツキストになったのであろうか。この問題は過去の関係文献・文章では、いずれも肯定的回答がなされている。だが、近ごろ、陳独秀がトロツキストであったということに対し、疑義が提出された。

なぜこのような異義が提出されるのであろうか。

この数年来、ある人の回想資料では、「1937年、陳独秀は出獄後、当時の『中央日報』編集長程滄波に、『中国にトロツキストがいるのかいないのか、私は知らないが、私はトロツキストではない』と釈明したことがある」⁽¹⁾といい、またある同志は、陳独秀は1937年11月21日付の陳其昌らに宛てた手紙の中で、「私はもういかなる党派にも属しておらず、いかなる人物の命令も指図も受けず、自ら主張し、自ら責任を負うものです」⁽²⁾と述べている、と提起しており、陳独秀もまた、『新華日報』宛ての手紙の中で、「私は長期の入獄と戦争中の連絡杜絶とにより、中国にトロツキスト組織が存在するかどうか、皆目存じておりません」⁽³⁾と述べているからである。陳独秀のこれらの言説をどう理解すべきであろうか。

われわれは、陳独秀の供述は、彼が1937年末から1938年当時には、組織的にはすでにトロツキストの一員ではなく、さりとてかつて中国トロツキストの重要な頭目であったことも否定できないことの表明であるにすぎない、と考える。上述の疑義を払拭するため、われわれは陳独秀とトロツキストの関係を、歴史的に回顧することにする。

陳独秀とトロツキストの関係は、あらまし三つの発展段階を経過している。第一は、彼がトロツ

キーの理論を受け入れてから公然と「無産者社」^{プロレタリアート}を設立するまでで、彼はトロツキスト活動を醗酵し従事しはじめた。第二は、数個のトロツキスト小組織が統一を協議し、彼が中国トロツキスト統一組織の首領となるまでで、彼のトロツキスト活動の高峰をなす。第三は、彼が逮捕・釈放され1942年に病没するまでで、彼はトロツキスト組織を離脱したが、依然としてトロツキストの観点を堅持していた段階である。明らかに、この異なった発展段階では、陳独秀とトロツキストの関係は異なった状況にある。

陳独秀は早くも党籍を剥奪される以前に、トロツキーの観点を受け入れていた。1929年春、彭述之はモスクワ帰りの留学生から、トロツキーの中国革命に関する二つの重要な文章「中国革命の概観と展望」〔原文＝「中国革命的回顧與前瞻」〕と「コミンテルン第6回大会以後における中国問題」〔原文＝「第六次大会後の中国革命問題」〕を手に入れた。彭述之はこの二つの文章を読み、トロツキーの中国革命に対する分析は極めて精確であると考え、トロツキーの立場と観点到同意した。すぐに彭述之は陳独秀に検討するよう転送した。陳独秀は読後、「ト氏の基本観点到完全に同意し、われわれ（彭述之と陳独秀を指す——筆者注）は中国共産党内部で左派反対派の組織を開始した……」⁽⁴⁾。

陳独秀らは1929年より、トロツキーの観点到おり、中国共産党内でコミンテルンに反対し中国共産党に反対する分派活動を進めた。彼らは党の当時の路線と方針及び政策に対し、一連の攻撃を加えた。そのため、党は1929年10月に特別決議（10月15日に中共中央政治局が採択した「党内の日和見主義

およびトロツキスト反対派に反対する決議」を採択し、「陳独秀同志は中央の決議に即時服従し、中央の警告を受け入れて、党の路線の下に工作し、全ての反党活動と反党宣伝を停止すべきである」と要求した。だが、陳独秀はこの決議に服従せず、反中央活動を続けたため、中央は同年11月15日に陳独秀らの党籍を剥奪する決定を行った。

陳独秀は党を除名されるや、公然とトロツキーの旗じるしを打ち出し、「何憚ることなくトロツキー同志の指導するコミンテルン反対派即ち真のマルクス＝レーニン主義の旗じるしの下に立ち、断固として折り合うことなく非妥協的にコミンテルンの、及び中共中央の日和見主義と徹底的に闘う」⁽⁶⁾と直截に自己表現して憚らなかった。

1929年12月、陳独秀は彭述之、鄭超麟らをかき集めて上海の昆明路で会議を召集し、トロツキスト組織「無産者社」^{プロレタリアート}を正式に成立させた。会議では陳独秀らが起草し、他のトロツキスト分子と連絡をとって共同署名した「われわれの政治意見書」^{プロレタリアート}が採択された。会議ではまた「無産者社」の中央指導機関の設立が決定され、陳独秀は書記に推された。1930年3月、彼らはトロツキストの刊行物「無産者」^{プロレタリアート}を出版し、同年後半には北平〔北京〕に「無産者社北平分社」を設立した。

陳独秀及び「無産者社」^{プロレタリアート}は、トロツキーの中国革命と世界革命に関する理論を指導方針とし、トロツキーの中国革命に関する主張を政治綱領とし、トロツキストの組織活動を積極的に行った。彼らは「われわれの政治意見書」で、いわゆるコミンテルン左派反対派の旗じるしの下に団結して、トロツキー同志ら反対派を召還し、その党籍を回復し、並びにトロツキー同志の指導権を回復する意見を提出し、5、6年来反対派がソ連共産党及びコミンテルンの政策に対して発表した各種文件の公布、ソ連共産党中央及びコミンテルン指導機関の犯した政治的・組織的誤りの再審査、並びにソ連共産党及びコミンテルンの政策の再決定を要求し、

中国共産党中央の日和見路線に反対したために除名された同志の党籍の回復、中国革命の教訓の再審査、並びに新しい政治路線の決定を提起し、ソ連共産党及びコミンテルンとその各国支部の指導機関を改組すべきこと、などを宣揚した。それに彼らは『無産者』^{プロレタリアート}第1期に、トロツキーの「中国では何が起きているか——すべての共産党員が自問しなければならぬ問い」を掲載した。陳独秀はもっぱら「紅軍問題を論ず」を書き、毛沢東・朱徳らの同志が指導する紅軍をなんと「新式の流寇」であると公然と侮辱して罵り、わが党を「プロレタリアートの政党ではなく、流氓・土匪・農民・学生の集団にすぎない」⁽⁷⁾と謗った。ここに至り、陳独秀は思想的政治的と組織的とを問わず、中国のトロツキストとなり、陳独秀の組織した「無産者社」^{プロレタリアート}は、中国トロツキストの一派となった。

陳独秀が墮落して中国トロツキストになったことは、すでに彼自身のこの間の歴史が証明している。また陳独秀が後に中国トロツキストの「統一首領」になったことは、さらに彼がトロツキストの道をますます遠く歩いていったことの表れである。陳独秀はどのようにして中国トロツキストの「統一首領」となったのであろうか。それはトロツキーが中国のいくつかのトロツキストグループに、組織を統一すべきだと要求した産物である。

中国最初のトロツキストには、陳独秀を頭とする小組織「無産者社」^{プロレタリアート}の外にも、なおいくつかのトロツキスト小組織がある。

まず「無産者社」^{プロレタリアート}のトロツキスト小組織は梁干喬（一説に梁干慈）を頭とする一派で、成員は数10人（一説に50人）^{われらのことば}。1929年に『我們的話』^{われらのことば}を出版し、「我們的話派」と称した。

「無産者社」^{プロレタリアート}成立後、劉仁静を頭にトロツキスト小組織が設立され、成員は20数人。1930年3月雑誌『十月』を出版し、「十月派」と称した。

1930年夏、トロツキスト分子王平らは雑誌『戦

闘』を出版し、「戦闘派」と称した。成員は20数人。

トロツキーは中国のトロツキストが四つの小組織に分散しているのに鑑み、1930年6月についてその統一を進めるよう指示した。いくつかのトロツキスト小組織はトロツキーの指示に基づき、「統一を協議する」代表大会を開催したが、各派が相互に攻撃し合い、結局物別れに終わり、統一は成らなかった。同年8月、トロツキーはまた中国のトロツキストに手紙を書き、早急に統一するよう指示した。手紙では、それぞれの見解には綱領と戦略上のずれはなく、ぜひ統一すべきである、と述べられている。だが各派は依然として相互に攻撃しあった。「我們的話派」は陳独秀を「重犯日和見主義」と罵り、劉仁静を「機械主義」と罵り、宋逢春を「真の解消派」と罵り、陳独秀・劉仁静・宋逢春の方は「我們的話派」を「スターリニスト」であると罵った。「戦闘社」と「十月社」は陳独秀を「根っからの日和見主義」と指摘して責め、陳独秀の方は「十月社」と「戦闘社」は極左派として排斥した。そこで各派いずれもがトロツキーに訴え出た。こういう状況下で、トロツキーは1931年1月8日、再び中国の左派反対派に手紙を書き、その冒頭で、「最近の文件を検討したところ、私は現在統一を進めている諸派間に、原則の分岐はないものと確信する」と述べている。こうして、彼は中国の各トロツキスト小組織と新聞雑誌に「今日こそ確実に合併すべきである」と要求した。同年3月、トロツキーはまた中国のトロツキスト各派に手紙を書き、(1)すぐに統一を進め、近いうちに統一の大会を召集すること、(2)大会代表は単位をもって代表とするのではなく、構成員による比例代表制とすること、(3)統一大会前に、協議委員会を組織し、委員は各派より一名推選して充て、各種の議案・宣言の起草、代表資格の審査等の事務を責任をもって処理すること、を要求している。最後に、彼は、「私は近く開かれるコミンテルン反対派大会に、統一した中国反対派代

表が出席することを希望する」と述べている⁽⁸⁾。

この間、トロツキーはなお多くの手紙を寄せ、統一は陳独秀を軸とすべきことを強調した。陳独秀は中国で名声があり、経験豊かな指導者であり、陳独秀を軸とし、彼の指導を受け入れない限り、中国トロツキストの事業にも前途がないと考えたからである。こうして、各派は不承不承代表をかき集めて「協議委員会」を成立させ、1931年5月1日に上海で「統一」大会を開催したのである。

大会は五日間開かれた。大会宣言と中国トロツキストの綱領が採択され、陳独秀は政治決議草案を報告、彭述之は職工運動決議草案を報告、来燕壘は土地問題決議草案を報告した。並びに組織問題が討論され、陳独秀を書記とする「中国共産党左派反対派（「中国共産党レーニン主義者左翼反対派」ともいう）の中央が選出された。会議では『火花』を機関紙として出版することが決定された。

右翼日和見主義から解消主義へと進み、墮落してトロツキストになった陳独秀に、なぜこれら極左の形式をもって出現したトロツキスト小組織との統一が可能であったのか。それは、当時陳独秀らは、自分たちの解消主義を安易に推し広めると、大衆の支持を得ることが難しく、それでトロツキーのいわゆる「中国はすでにブルジョア民主主義革命を達成しており、社会主義革命に備えるべきである」こと、つまり「永続革命」の実行を政治綱領とし、その他のトロツキスト小組織と合流し、協同して中国におけるトロツキズムの道を探らざるをえなかったからである。陳独秀は中国トロツキストを統一した後、その刊行物を通して、彼らの政治主張——スターリン及びコミンテルンの中国革命の指導方針と路線に反対し、困難な状況下で闘っている中国共産党に反対し、かの「無記名選挙を基礎とする全権国民会議」を実現すること——を喧伝した。彼らはスターリン同志の「一国で社会主義を建設する」理論は反動的であ

り、レーニンの「永続革命論」に違反するものである、と批判し、中国共産党が革命根拠地で打ちたたてた「労農民主独裁」は「プロレタリア独裁」と対立するものである、と攻撃した。

陳独秀及びトロツキスト中央は統一後、トロツキストの地方組織と下部組織を積極的に建設し、華北区委・華南区委・上海滬西区委・滬東区委と済南区委を建設し、山東・河南・広東・広西・福建でも彼らの下部組織を建設した。しかしながら、陳独秀とその他いくつかのトロツキスト小組織は、反マルクス＝レーニン主義の一味であることから、真の統一と団結は不可能であった。統一後の中国トロツキストは、400人を擁する統一組織と称したものの、内部は依然として面従腹背というのが実情であった。統一大会終結後、数日のうちに、トロツキスト内部の奪権争いが再燃した。間もなく、トロツキスト中央は陳独秀・彭述之・羅漢ら三人を除き、すべて内部の密告により国民党政府に拘留された。1932年10月15日、陳独秀・彭述之も国民党政府に逮捕され入獄した。陳独秀のトロツキスト活動もそのため中断を余儀なくされ、中国のトロツキスト小組織は衰退の一途をたどった。

上述の状況は、陳独秀が1930年春から逮捕されるまでの間、トロツキーの理論と政治主張を受け入れ、すすんでトロツキーの指導に直接従い、中国トロツキストの「統一首領」となり、反コミンテルン・反中国共産党活動をし続けたことを物語っている。彼は正真正銘のトロツキズム分子であるだけでなく、中国トロツキストの「統一首領」でもあった。したがって中国トロツキストの興亡に密接な関係をもつのである。

陳独秀が逮捕されると、彼とトロツキストとの関係に新しい変化が生じた。

陳独秀が逮捕されトロツキスト中央が破壊されたことにより、中国トロツキストは混乱し麻痺状態に陥った。中国トロツキストはトロツキーの指示に基づき、1935年1月に「新党を結成」し、「中

国共産主義者同盟」とする動きがあり、また1935年末にトロツキスト臨時中央が成立するものの、現在までのところ陳独秀がこれらの活動と関係があったことを説明する材料はない。1937年9月、陳独秀は釈放されると、繰り返し自分はもうトロツキストではない、と表明した。1938年3月18日、陳独秀は『新華日報』に宛てた手紙の中で態度を表明している。「私は南京で葉剣英と話しあった時、『私の意見は、陳独秀以外のなんびとをも代表しない。私は中国の大多数の人びとのために語るものであり、いかなる党派にも拘束されたくはない』と声明した。武漢へ来てから、今日までずっと、このような態度であったし、抗戦中の紛糾に火に油を注ぐようなことを避けるため、ずっといかなる党派にも参加せず、出版物も創刊しなかった」⁹⁾。同じ手紙の中で、彼はまた、「事実は雄弁に勝り、私はいかなる声明も蛇足であると思う。以前、私が盲動政策に反対したため、中国共産党より解消主義として党籍を剥奪されたことは、世間周知の事実である。それで人が私に『赤匪』離脱を公開で声明するように要求しても、私はそれを蛇足として拒絶した。私は現在もトロツキストに対し、同様に蛇足を加えるようなことはしたくない」¹⁰⁾と言っている。陳独秀はここで、トロツキスト組織より離脱はしたが、しかし声明を公開発表する必要はない、と表明している。当時少なからぬトロツキストが、「陳が出てきて、トロツキストを組織するように望んだ……が、陳の回答は『各自それぞれの道を進め』」¹¹⁾であった。これらの材料からすると、その時の陳独秀はすでにトロツキストとの関係を断つ決心をし、トロツキストであることを否定していたのである。だがわれわれは、陳独秀がその時トロツキストであることを否定したのは、過去にトロツキストを組織して反コミンテルンと反中国共産党の活動をした罪過を悔悟してではなく、トロツキズムに対する信仰を失ったのでもなく、中国トロツキストに対する不

満と失望からであった、と考える。この点は1939年のトロツキーへの手紙で、十分吐露されている。彼は手紙で、あるところでは中国トロツキストを批判して、「このような閉鎖主義的極左小集団(その中で同意しない分子はきわめて少なかった)では、もとより発展の見込みはない。かりに発展しえたとしても、かえって中国革命運動の障害になる」⁽¹²⁾と述べている。また別のところでは、中国トロツキストの前途に対して関心を示し、「中共の党員数は遥かにわれわれを上回り、……われわれが上海・香港の二カ所で組織したのは、合計50名に満たず、その他全国各地の遊離分子〔未組織トロツキスト〕が100余名である」⁽¹³⁾と嘆いている。それで、彼はトロツキーに、中国トロツキストは「日本が占領し続けている環境の中で、当地の狭い範囲内で、初めからやり直すことを、早急に準備し」、「100パーセントの力を民主民族闘争に捧げるべきであり、そのうえで、「国民党支配地区でも「同様の方針を採用すべきであり」、「プロレタリア階級の政党(もちろんトロツキストの——筆者)を再建する中心勢力とする」と建議している。その時、陳独秀は依然としてどのようにトロツキストの「中心勢力」を再建するのかを考え苦慮していたのである。陳独秀死去前の二年余り、西流らへの手紙を除き、トロツキストに一般的に言及した外、陳独秀とトロツキストの関係に何か新しい変化があったことを説明するその他の材料は見当たらない。これに基き、われわれは、陳独秀は逮捕・釈放から病没するまでの間、トロツキスト組織から離脱はしたが依然トロツキストの観点を保持した人物であった、と考える。彼には自分がトロツキスト活動に従事した罪過を批判する勇氣はなく、思想的組織的にトロツキストときっぱりと手を切る徹底さもなく、なおトロツキストとのくされ縁が続いていた。1938年3月の『新華日報』のある短評の中で、陳独秀を評した来信ではこう述べられている。「かつては中国トロツ

キストの首領の地位にあった陳独秀が、今日どの党派にも参加していないと声明したが、この意味はもちろん彼が現在、過去に参加したことがあり、なおかつその指導者となったトロツキスト組織からすでに離脱したことを言っているのである。……陳独秀がこのような表明をするについては、なお恥を知る心が残っていると十分見受けられる。これは賛同に値すべきことである」⁽¹⁴⁾。だが、短評にはこうも述べられている。「陳独秀はトロツキスト漢奸との組織関係を断つ声明をしたとはいえ、彼は依然過去の仲間と部下に反対しようとせず、あれら全く良心を喪失したトロツキスト漢奸に反対しようとしないうえ、そのうえ弁解に力を注いでいる……してみると、陳独秀はすでにトロツキスト漢奸と組織関係はないと声明したが、しかし今日に至るもなおトロツキストの思想のとりこになっていることが分る」⁽¹⁵⁾。これが陳独秀のこの間のトロツキストとの関係に対する基本的な論評である。

陳独秀とトロツキストの関係を研究するうえで、なお一つ明確にすべき点——つまり、陳独秀自身が漢奸特務であったかどうかという問題——がある。

中国のトロツキストの状況は複雑であった。とりわけ1931年の「九・一八」事変以降、トロツキストのうち、ある者は抗日を主張し、ある者は漢奸となり、またある者は国民党の特務になった。姚文元のようにやり手の費俠は、トロツキストであり、国民党の特務にもなった。トロツキスト張慕陶のたぐいは後に日本人に仕え、漢奸になった。だが確かにいく人かのトロツキストは抗日に反対もしなければ、日本侵略者や国民党のために働くこともしなかった。陳独秀はこのグループに属する。

事実、陳独秀は党籍を剥奪されてから1937年の抗日戦争の勃発までずっと、まさに困難な状況下で闘っていた中国共産党及び中華ソビエト政権に

反対したが、国民党の反動支配にも反対した。彼のトロツキスト中央が出版した『火花』は、かつて第1巻第7期で「国民会議」を主張し、「労農民主独裁」に反対する、と宣言した。それはつまり蒋介石及びそのもとに召集された国民会議を駆逐し、彼らの主張する「普通・平等・直接・無記名選挙を基礎とする全権国民会議」がこれに取って代わることを要求するものであった。彼らの作成した「日本帝国主義の満州侵略に対する第二回目の民衆に告げる書」の中では、日本軍が東北を侵略し、錦州を脅かすのを指摘し、告発して、国民党の投降政策に反対し、その支配を覆すことを主張している。国民党が1932年に陳独秀を逮捕したのは、陳独秀の活動が国民党の支配を危うくしたためであり、彼が国民党の特務を担当したという理由からではない。これは極めて明白な事実である。

陳独秀が逮捕され、何応欽に会った時、「三軍可奪師也、匹夫不可奪志也」〔三軍も師を奪うべきなり。匹夫も志しを奪うべからずなり。（大軍でも、その総大将を奪い取ることはできるが、一人の男でも、その志しを奪い取ることはできない）——『論語』子罕、岩波文庫版による〕の13文字⁽¹⁶⁾を記し、国民党の圧力に屈服しないことを表明した。陳独秀は国民党の法廷で国民党が「危害民国」と「叛国」の罪で13年の徒刑に処す判決を下したことに對し、不服を表明した。彼は「弁訴状」で、「国民党政府は党機関を以って議會に代え、訓政を以って民権の代わりとし、特別法（例えば、危害民国緊急治罪法、及び出版法など）を以って刑法に代え、軍法を以って一般の人民を逮捕して裁判にかけて銃殺し、銃剣を以って人民の自由と權利をはぎ取っている……。試みに問う、誰が『民国を危うくし』ているのか」⁽¹⁷⁾と述べ、また「国民党は全国人民の膏血を搾り尽して兵を養い、全国に軍隊を擁して人民を統轄し、己に異を唱える者を殺戮し、日本の国土侵略に對して、終始本腰を入

れて抵抗せず、そのうえ人民の抵抗を制止し、人民の組織を破壊し、人民の口舌を押えつけ、『鎮静』させ、『沈着に對処』させる。即ち国民党の支配下で飼い慣らされた羊とし、帝国主義に屈服し、むしろ全国が占領されようとも、異議・異説を唱える者の存在を許さない。而るに私は人民自らが組織と武装を拡大し、帝国主義に對して民族戦争を行い、以って東北問題を解決し、国家の独立を完成せんことを主張する。試みに問う、誰が『叛国』なのか」⁽¹⁸⁾と述べている。陳独秀はまたこうも述べている。「今の国民党の敵視する者は、帝国主義に非ず、軍閥官僚に非ず。即ち徹底して帝国主義に反対し、軍閥官僚に反対し、終始最も徹底的に民族民主革命に努力する共産黨員なり。日本帝国主義のまさに山海関を奪取し、熱河を急攻せんとするも、国民党の軍隊は、かえって江西に集中せり。それは共産黨員に對処するものなり。これを殺しこれを囚うも、なおもって未だ足らずとす。さらに袁世凱の故智にならい、威力をもって強要し、利益をもって誘い、自首密告を奨むるも、真の共産主義者を消滅できず、ただ廉恥心を破壊して国民を辱しむるのみなり」⁽¹⁹⁾。このような、国民党の罪行に慷慨激昂し、痛斥する訴えは、決して国民党特務のなし得るものではない。第二次国内革命戦争の時期に、陳独秀はトロツキストの立場にたって多くのわが党とソビエト政権を攻撃する言論をなし、客觀的に国民党を援助する役目を果たした、というなら、このような分析は正確であるが、しかしだからといって陳独秀が直接国民党のために奉仕し、国民党特務となった、と考えることはできない。陳独秀は抗日戦争勃発後、国共が合作し統一戦線を組むという新しい情勢を見て、過去の反蔣反国民党より転じて蒋介石と国民党の抗日を擁護し、それでも不十分と考え、国民党の指導の下で、「すべて蔣委員長に服従し」て抗日戦争を行おうとしたのであり、それで彼は多くの文章を書いて国民党を弁護したのである。

批判的に、彼が国民党の弁護人になったというのは正しいが、しかしだからといって彼が国民党特務であるというのは、誤りである。

上述の史実を総括すれば、陳独秀は党籍を剥奪されてから逮捕されるまでは、トロツキストの頭目であり、反コミンテルン反中国共産党のトロツキスト活動を行った。逮捕中と釈放後は、トロツキストとしての組織的活動は停止したが、しかし依然トロツキストの観点を有していた。過去に彼を国民党特務とするデマがあったが、事実ではない。「陳独秀とトロツキスト」というテーマを研究するには、これらの状況を全面的に考慮すべきである。陳独秀がトロツキストであることを否認したからといって、彼がかつてトロツキストであったことに対して疑いをはさむことはできない。また彼が前半にトロツキストの頭目であったからといって、逮捕され出獄した後はトロツキストとしての組織活動を停止し、ただトロツキストの観点を堅持していただけである、という事実を否定することはできない。さらに中国のトロツキストの中に国民党特務あるいは日本帝国主義の漢奸となった者がいたからといって、陳独秀も特務・漢奸である、とすることはできない。中国トロツキストの性質規定をすることと、トロツキスト組織の中の陳独秀個人に対し事実を照らして活動を記述することは別の事柄である。両者を截然と分離することはできないが、決して混同して論じることともできない。人間の表情や主張はそれぞれ異なるものであるのに、それを千篇一律のごとく論じたのでは複雑な歴史の状況に照応しないことになるのである。

〔原注〕

- (1)(16) 「包惠僧談陳独秀」1979年2月8日。
 (2) 「陳独秀給陳其昌等的信」1937年11月21日。
 (3)(9)(10) 「陳独秀致『新華日報』的信」1938年3月18日。

- (4) 「彭述之簡史」、『明報旬刊』（香港）1968年6月号第18期。
 (5) 「中共中央政治局關於反对党内機會主義與托洛茨其反对派的決議」。
 (6) 陳独秀「告全党同志書」。
 (7) 『無産者』第1期。
 (8) 『現代史料』第3集，海天出版社，1934年4月。
 (11) 黄鋼鑒『中国托匪組織前期歴史概況』
 (12)(13) 陳独秀「給托洛茨基」的信。
 (14)(15) 『新華日報』短評「關於陳独秀来信」1938年3月。
 (17)(18)(19) 陳独秀的「弁訴状」1933年2月20日。
 ＊原題「陳独秀與托派」（『安徽大学学报＜哲学社会科学版＞』1980年第2期所収）。

—————（35頁よりつづく）—————

＊これを見た中国共産主義同盟（ボルシェヴィキ＝レーニン派）は9月25日発行の『火花』第3巻第3期に「特別声明」を発表した。

1. ……魯迅のように権威にへつらい、眞の革命家精神を欠き、徒に悪罵して政治常識のない人間に、もともと手紙を書くなどありえない。

2. このたび陳××が魯迅に手紙を出したのは全く彼の個人的行為であり、ことは政治問題に及ぶとはいえ、本組織とは無関係であり、まして本組織を代表しての発言ではない。

3. 魯迅は私信の返事に「某派に答える」などと大題目をつけて肆に本組織全体を中傷し、かつトロツキー同志の名誉と人格を誹謗した。これに対し、我々は貴重な時間と精力を浪費して魯迅と無益な論争をすることを潔しとしない。我々はあらゆるプロレタリア戦士と全ての革命家を糾合し、スターリン党が全世界の階級敵と野合して、我々、とりわけトロツキー同志を恥知らずにも中傷している事実抗議する。魯迅の中傷は、この悪辣な大きな流れの中の一細流だからである。

『魯迅研究資料(8)』天津人民出版社，1981年。